九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Development of a nursing care problems coping scale for male caregivers for people with dementia living at home

西尾, 美登里

https://doi.org/10.15017/1522379

出版情報：九州大学, 2015, 博士（看護学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名：西尾美登里

論 文 名： Development of a nursing care problems coping scale for male caregivers for people with dementia living at home.
（在宅で認知症者を介護する男性の介護問題対処尺度の開発）

区　　分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

高齢社会を迎えた我が国の認知症高齢者の数は、2013 年の 472 万人から 2025 年には 700 万人を超えると推計されている。認知症は認知障害が低下する病態であり、精神症状や問題行動、日常生活活動の低下など、在宅で介護する介護者の心身の負担を増大させている。現在、在宅で認知症者を介護する男性介護者の割合は 3 割を占め、今後ますます増加が予想される。先行研究において男性介護者は、介護問題やストレスを抱えても、周囲に助けを求めない人が多く、介護問題にうまく対処出来ていないことが報告されている。

そこで本研究では、男性介護者による在宅で認知症者の介護の継続を目指し、男性介護者の QOL を向上させるための介護問題対処尺度を開発し、その信頼性と妥当性の検証を目的とした。介護問題対処尺度は、先行研究と男性介護者のインタビュー調査より抽出された要素を基に、表面妥当性が得られた 21 項目の質問で構成し、3 件法にて回答を得るものである。これを用い、さらに Zarit 介護負担尺度日本語版(J-ZBI)、うつ症状の重症度得点（Self-Rating Depression Scale 得点）、ローゼンバーグの自尊心感情尺度項目得点について自記式質問紙調査を行った。

その結果、21 項目の各平均値は 1.56 から 2.68 であった。全体の回答分布の中央値は 39（SD6.6）であり、最頻値は 40、平均値は 38、最小値は 21 であり最大値は 61 であった。天井効果は 5 項目、床効果は 2 項目にみられた。介護問題対処尺度案と Zarit 介護負担尺度日本語版、うつ症状の重症度得点、ローゼンバーグの自尊心感情尺度項目総得点において、有意な相関を認めた。介護問題対処尺度は、中央値、平均値、最頻値の結果より正規分布が認められ、男性が介護において問題対処を明らかにするための指標であると考えられた。信頼性は、Cronbach`s alpha は 0.49 で、約 50%の安定性があると考えられた。妥当性は、Zarit 介護負担尺度日本語版(J-ZBI)、うつ症状の重症度得点、ローゼンバーグの自尊心感情尺度項目総得点と当尺度の 21 項目中 19 項目において有意な相関が認められた。このような結果から、開発した介護問題対処尺度は、一定の信頼性、妥当性を有することが示唆された。